

大江健三郎著

ヒロシマ・ノート



岩波新書

F 27

大江健三郎 著

ヒロシマ・ノート

岩波新書

563

大江健三郎

1935 年愛媛県に生まれる

1959 年東京大学文学部フランス文学科卒業

現在—作家

著書—小説 「M/T と森のフシギの物語」「キルプの
軍団」「治療塔」「治療塔惑星」(以上、岩波書店)
「死者の奢り」「個人的な体験」「万延元年のフ
ットボール」「同時代ゲーム」「雨の木」を聴
く女たち」「新しい人よ眼ざめよ」「懐かしい
年への手紙」「燃えあがる緑の木」
エッセイ 「沖縄ノート」「新しい文学のために」
(以上、岩波新書)
「核の大火と「人間」の声」「小説の方法」
「人生の習慣」「新年の挨拶」(以上、岩波書店)
「小説の経験」など

ヒロシマ・ノート

定価はカバーに表示してあります

岩波新書(青版)563

1965 年 6 月 21 日 第 1 刷発行 ©

1994 年 12 月 20 日 第 59 刷発行

著 者 おお え けんざぶろう
大江健三郎

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・永井製本

ISBN4-00-415027-2

Printed in Japan

¥580-

目次

プロローグ 広島へ…… 1

I 広島への最初の旅 15

II 広島再訪 45

III モラリストの広島 69



Ⅳ 人間の威厳について 89

Ⅴ 屈伏しない人々 109

Ⅵ ひとりの正統的な人間 131

Ⅶ 広島へのさまざまな旅 149

エピローグ 広島から…… 169



プロローグ
広島へ……



ピカ……ドン……市内から郊外へ、ものすごいきおいで、一ばん先に走ったのは牛たちでした。

このような本を、個人的な話から書きはじめるのは、妥当でないかもしれない。しかし、ここにおさめた広島をめぐるエッセイのすべては、僕自身にとっても、また、終始一緒にこの仕事をした編集者の安江良介君にとっても、おのおののきわめて個人的な内部の奥底にかかわっているものである。したがって僕は、一九六三年夏の広島にわれわれがはじめて一緒に旅行したときの、ふたりの個人的な事情について書きとめておきたいのである。僕については、自分の最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわったまま恢復のみこみはまったくたない始末であったし、安江君は、かれの最初の娘を亡くしたところだった。そして、われわれの共通の友人は、かれの日常の課題であった核兵器による世界最終戦争のイメージにおしつぶされたあげく、パリで^い縊死してしまっていた。われわれはおたがい、すっかりうちのめされていたのである。しかし、ともかくわれわれは真夏の広島にむかって出発した。あのようにも疲労困憊し憂鬱に黙りこみがちな旅だちというものを、かつて僕は体験したことがなかった。

広島に到着して数日間の第九回原水爆禁止世界大会の日々、それがまた、われわれを、ますます疲労困憊させ、われわれの憂鬱を深刻にするものだった。それは、一章に描写するとおり、じつに、^いが、困難の感覚にみちみちた大会であった。はじめのうちは大会が実際にひらかれるかどうか疑わしかったし、いったん大会がひらかれると、それはすでに分裂した大会にすぎなかった。われわれは、暗く索漠たる気分で、汗と埃りにまみれ、嘆息したり黙りこんでしまったりしながら、大会に動員されたいかにも真面目な人々の大群の周辺をむなしく駆けまわって

いるだけだった。

しかし一週間後、広島を発つとき、われわれはおたがいに、自分自身がおちこんでいる憂鬱の穴ぼこから確実な恢復にむかってよじのぼるべき手がかりを、自分の手がしっかりつかんでいることに気がついていたのである。そしてそれは、ごく直截に、われわれが、真に広島的な人間たる特質をそなえた人々に出会ったことにのみ由来していたのであった。

僕は広島のも、まさに広島の人間らしい人々の生き方と思想とに深い印象をうけていた。僕は直接かれらに勇気づけられたし、逆に、いま僕自身が、ガラス箱のなかの自分の息子との相関においておちこみつたある一種の神経症の種子、頽廢の根を、深奥からえぐりだされる痛みの感覚をもあじわっていた。そして僕は、広島とこれらの真に広島的な人々をヤスリとして、自分自身の内部の硬度を点検してみたいとねがいはじめていたのである。僕は戦後の民主主義時代に中等教育をうけ、大学ではフランス現代文学を中心に語学と文学の勉強をし、そして仕事をはじめたばかりの小説家としては、日本およびアメリカの戦後文学の影のもとに活動している、そういう短い内部の歴史をもつ人間であった。僕は、そうした自分が所持しているはずの自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島のヤスリにかけ、広島のリズムをとおして再検討することを望んだのであった。

それ以後、僕はくりかえし広島に旅行し、そして安江君の属する『世界』編集部が僕のエッセイを掲載した。ここにおさめた一連のエッセイがそれらのすべてである。僕は広島への次つ

ぎの旅ごとに新しく、真に広島的な人々にめぐり会った。それは僕にもっともめざましい感銘をもたらしした。しかし僕はまた、じつにたびたび広島のこうした人々の死の通知に接しなければならなかったのである。僕のエッセイが雑誌にのりはじめると、とくに広島から数多くの切実な手紙がよせられた。それらの手紙のうち、典型的なものの一節を、ここにかかげたい。この手紙の書き手、松坂義孝氏は、五章に引用する広島の不屈の医師たちの記録のうち、負傷しながらもなお医大生の子息の背におわれて救護活動におもむき、着実な仕事をされた松坂義正氏の子息である。すなわち傷ついた医師を背おって被爆直後の広島市街を救護所にむかった医大生が、この義孝氏である。現在、かつての医大生は皮膚科の医師として広島で開業している。

「……広島の間人は、死に直面するまで沈黙したがるのです。自分の生と死とを自分のものにしたい。原水爆反対とか、そういうった政治闘争のための参考資料に、自分の悲惨をさらしたくない感情、被爆者であるために、すべてが物乞いをしているとはみられたくない感情があります。もちろん救援資金をうるために被爆者の悲惨を訴えることは原水爆反対の目的の訴えよりもっと切実であり、もっともとしなければならぬでしょうが、一応健康を恢復し、普通の生活をしている被爆者が、それを沈黙して、元気な被爆者の税金なり、年賀葉書の利益金なりが還元されるという方法を願っている、そういう連帯の仕方をこのましく思っているのも事実です。物乞い、カンパにどれだけ実効がありましたでしょうか。」

……沈黙することの不可をほとんどあらゆる思想家、文学者が口にして、被爆者に口をわることすすめました。わたくしはわたくしたちの沈黙の感情をくめないこれらのひとびとを憎悪していました。わたくしたちは八月六日を迎えることはできません。ただしずかに死者と一緒に八月六日をおくることのみできます。ことごとしく八月六日のために、その日の来るのを迎える準備に奔走できません。そういう被爆者が沈黙し、ことばすくなに、資料としてのこす、それを八月六日、一日かぎりの広島での思想家には理解できぬのは当然です」

これは広島について沈黙する唯一の権利をもつ人々について書いた僕のエッセイに対する共感の言葉として書かれた手紙ではあるが、僕はそれにはげまされながらも、同時に広島の外部的人間である自分の文章全体に、もっとも鋭い批判のムチが加えられたことにも気づかざるをえない。

松坂氏は、広島の同人誌『歯車』最近号に、深田獅子雄という名において、次のように書いているが、それは僕への手紙における氏の考え方、感じ方をもっと直截にあきらかにするものであって、僕は、そこにもまた、広島の外的人間への広島内部からの正当な批判の声を見出す。これは、いわば広島の若い知識人の正当防衛の声である。僕は自分の文章が、次の文章とあわせ読まれることを望んでいる。

《大江氏のいう、広島の被爆した医師は、——被爆者の後遺症に直面して絶望的にならざるを得ぬ医師は、また、みずからの運命を直視してそうならざるを得ず、したがって、しばしば、

原爆症はなくなつたとかいった楽天的な報告をおこないそのあとで、にがい訂正をくりかえしたはずであつた。しかし、わたくしは、爆心地より一キロ半にありながら、いささかの後症状はあつたが、現在、まず健康であり、父母も、おなじく被爆した当時の女学校二年生の妻、また昭和三十年代に生まれた三人の子供も、すべて健康であるところから、できるだけ、後遺症の発現のないことで楽天的であろうとした。そのためであろうか、原爆の文学とよばれるものが、ほとんど、恢復不能な悲惨なひとたちの物語であり、後遺症の症状、心理の描写であるより他に、ありようがないのかを以前から訝っていた。たとえば、被爆して、ひととおりの悲惨な目にあつた家族が、健康を恢復し、人間として再生できたという物語はないものだろうか。被爆者はすべて原爆の後遺症で、悲劇的な死をとげねばならぬものである。被爆者が死ぬとき、さきにいった健康と心理的な被爆者の負い目とか、劣等感とかいったものを克服して、普通の人間の死、自然死をとげることはゆるされないのかを考えた。わたくしたちが死ねば、すべて原爆後遺症の招来した悲惨な死であり、それは原爆への呪いをこめた、原爆反対に役だつ資料としての死であるとしたか考えられないのだろうか。たしかにわたくしたちの生は、原爆に被災したために大いにまげられ、苦しめられたことは否定できない。しかし、これは、原爆でなくとも、戦争を経過したひとたちは、程度の差はあれ、なめていることであらう。わたくしは、とくに広島に被爆者のみの、被爆者意識という、なにか甘えた感情があつてはならないとみずから戒めた。みずから治癒をはかり、みずから人間を恢復して、原爆をうけながら、

それにもかかわらず、うけない人間とおなじく、原爆によらない死をわがものとしていたいねがいをもつようになった。

被爆後十九年、九十三歳でなくなったわたくしの祖母は、その生涯は幸福とはいえない変転をへたが、健康に終始し、まず原爆後遺症ではなさそうな、自然死をとげた。そういう、被爆者の、原爆の影響を脱した自然死も往々にはあるということを考えてほしい。被爆者の死は、ちょうど、八月六日の広島市がやたらと政治的な発言にみちみちて、しずかな喪であるべきその日が余所者の支配となりかねないように、他所の政治的発言のための資料のためにだけあるようには考えないでほしいと思う。……後遺症もなく、原爆反対の資料とされるよりも切実に、みずからの普通の人間にかえりたく思っている楽天的な、被爆者もいることを忘れずにあってほしい」

「先日、長崎で、原口喜久也という被爆者で詩人であったひとが、骨髄性白血病であったか、診断されてから縊死したということを、ふとした機会から、その遺稿詩集の後記で知って暗然とした。……その原口氏が死んだのは、原爆の後遺症でなく、みずからの下した死で死にたかったのではないか。すべてひっくりかえして、原爆後遺症として非人間的、没个性的に一括されるのではなく、ひとりの生をいきた人間の、いかにもそのひとらしい死を、原爆の手からはなれて遂げようとしたのではないかと解したい。

原口氏の健康への違和感是被爆者への詳細な検診がなければ、その病因はあきらかにされな

かったであろう。単なる違和感としてのみあって、突然の死が来たであろう。ところが被爆者には、そういう楽天的な違和感はめぐまれない。訪れるのはすべてあきらかに、長期にわたって耐えねばならぬ、確実な、原爆後遺症という、死への段階である。そういう診断が、およそ恢復ということの常識的に考えられない以上、それに耐えるにあたいする生を遂げ、その生のみこうにそれに応じた死を計画することがいかに困難であるか。……原爆後遺症の最終まで生きてなすべきをなしていることが、被爆者の人間を恢復する唯一の方法であるのか、原口氏や原民喜はらたみきのように、潔癖に自分の死をとげることが、そのひとたちの人間を恢復するそれであるのか、わたくしにはわからない」

かくのごとくこれらのエッセイは、広島の人々の直接および間接の協力と批判に支えられて進行了のであった。僕はいま、あらためてそれらをヒロシマ・ノートとして総合し刊行するのであるが、僕自身の内なる広島がこの出版によって完結するのではない。いわば僕はいま、広島のなるものうちへ入りこんだばかりだ。それに、もし広島に対してあえて眼をつむり耳をとざし舌を縛ろうとする者にとってでなければ、かれの内部において広島のなるものがすっかり完結することは決してないであろう。

この三月二十二日午後、広島で、自殺したひとりの婦人の葬儀がおこなわれた。死者は原爆のもたらした悲惨とそれに屈伏しない人間の威厳について、もっとも秀れた詩をのこした峠三吉とうげさん氏の未亡人であった。被爆による癌の恐怖が夫人をうちのめしたという噂がある。しかし、

われわれはまた、夫人の自殺の数週間前、なにものかが、峠三吉詩碑をペンキで汚し、夫人にショックをあたえたということについても記憶しておかねばならないであろう。広島の間が、その孤独な内部の悲惨にたちむかうにあたって発動する忍耐力は、決して固定したドグマティックなものではないはずである。その日々の困難な忍耐の間に、卑劣な人間が乗じようとする、孤独な未亡人の忍耐力をおしつぶしてしまふことは容易であろう。この、もつとも卑しい悪意のペンキが汚した詩碑にきざまれている詩人の叫び声に、じつに厖大ぼうだいな数の人間が、決して耳をかたむけようとしなない時代、十二年前に肺葉摘出手術のさなか、被爆した肉体が抵抗力をうしなつてついに死にいたつた詩人の思い出とともに、未亡人は最悪の孤立感の暗闇くらやみにおちいり、その、より暗い深みへと沈みこみつづけるより他に、いったいどうすることができたろう？ 未亡人の実姉である広島母の会の小西信子さんの言葉はわれわれをうつ。《妹よ、よくすべてのことを成し遂げてくれました。峠さんとともに悔いのない一生であつた、と私は賞讃の言葉を惜しみません》

ちちをかえせ

ははをかえせ

としよりをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ

わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの

にんげんのよにあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ

この叫び声は、じつはわれわれ生き残っている者たちのためにこそ発せられた詩人の声なのであるが……

おなじ三月二十二日午後、東京では、やはりわれわれ生き残っている者たちのために切実な叫び声をあげ、そして、その叫び声のはらむ祈りとはおよそ逆の方向に、人間の世界が回転する、おぞましい兆候が確実にあらわれた時、絶望感と毒にみちた屈辱感とともに自殺したひとりの作家の記念講演会がひらかれていた。作家、原民喜は広島で被爆し、広島すべての人間

が沈黙を強制されていた一九四五年暮、すでにあの正確な『夏の花』を書いていた。そして朝鮮戦争がはじまった翌年、作家は自殺したのである。このようにも典型的な広島の人間の思い出がなおなまなましい以上、われわれの誰の内部で、広島的なものがすっかり完結してしまふだろうか？

この春、僕は沖縄へ旅行した。沖縄の人々はみな穏和な微笑をたたえて、われわれ本土からの旅行者をむかえたが、唯ひとり、どのような自制心を発動してもなお、その微笑はたちまちこおりつき、穏和な表情の底から不信と拒否の感情のこみあげてくることを禁じえないでいる、そのような婦人に僕は会った。そして彼女の態度こそはもっとも正当なものだったのである。われわれは戦後二十年間、沖縄のすべての原爆被災者がまったく放置されてきたことをあらためて認識しなければならぬ。かれらは広島や長崎で被爆したあと沖縄の故郷にもどった。それはすなわち、傷ついた自分自身を原爆症治療についてまったく白紙の状態の離島へ追放することだったのである。沖縄本島で、あるいは石垣島や宮古島で、いまその症状を検討すれば、あまりにもそのあきらかな原爆症の死者があらわれつづけた。たとえば、沖縄相撲では八重山群島で横綱をはるほど壮健だったひとりの青年が長崎の軍需工場で被爆して石垣島に帰った。一九五六年、かれは突然、半身不随となった。自分で放射能障害ではないかと疑い、かれは島の医師に相談したが、当然のことながら沖縄の医師は原爆症についてまったく知らないにも知らず、かれはそのまま放置されるほかなかった。やがてかれは坐ったまま動けなくなり、^{からだ}身はすさま

じく腫れあがり、そして六二年、かつての沖縄相撲の横綱は、むなしくバケツに半分もの血を吐いて死亡した。それでもなお、かれが原爆症で横死したことを確認できる医師は沖縄にいなかったのである。

沖縄原水協がつくったりリストにのっている一三五人の被爆者たちのほとんどが、おおかれ少なかれ躰の異常を感じている。しかしかれらの不安の訴えはすべて、沖縄の医師たちによって、疲労だとかノイローゼだとかいってしりぞけられるほかない。もっともそれは沖縄の医師たちに責をおわせるべきでなく、本土から原爆病院の専門医が沖縄をおとずれるほかに解決しようのない状況であろう。われわれは沖縄に二十年間放置されてきた被爆者たちの不安と憎悪の総量のまえて、なお眼をとじ、耳をふさぎ舌を縛りつづけていられるだろうか？ しかも、おそらくは広島と長崎をおそった今世紀最悪の怪物のもたらしたものによって、疲労感に領された躰を、不安な魂において支えねばならない一三五人をこえる被爆者たちは、現に核兵器の基地と同居しているのであり、しかもそれに対して沈黙をまもるほかない人々なのである。この沖縄の被爆者たちが、われわれに対して微笑をうしない、不信と拒否の表情を示すことほどにもごく素直な心理反応はないであろう。しかもなお、これらの忍耐強い人々はわれわれ本土の人間に、二十年間みだされなかった期待をかけているのである。

三月二十六日、政府は沖縄に住んでいる広島、長崎の原爆被爆者に対する医学調査団を四月中に派遣することを発表した。調査のあと、入院の必要をみとめられたものについては厚相の